

keyword:イタリア都市史/西洋建築史/文化的景観/街路空間



片山 伸也 研究室
Shinya Katayama Lab.

Profile

1992 東京芸術大学美術学部建築科卒業
1993-95 フレンツェ大学建築学部 留学
1996 東京芸術大学大学院美術研究科
1997-00 修士課程修了
2003 (株)曽根幸一 環境設計研究所
2003-06 東京芸術大学大学院 博士課程満期退学
2006 東京芸術大学美術学部 非常勤助手
2011- 日本女子大学家政学部住居学科 専任講師
日本女子大学家政学部住居学科 准教授

Works

2013 『中世後期シエナにおける都市美の表像』
中央公輪美術出版(地中海学会ヘレンド賞受賞)
2014 「14-16 世紀のイタリアにおける都市空間の
変容」都市史学会『都市史研究』
2017 『古代ローマの港町オステア・アンティカ研
究の最前線』勉誠出版(分担執筆)
2019 『世界都市史事典』昭和堂(分担執筆)
2020 『イタリアの中世都市 ーアゾロの建築から領域
まで』鹿島出版会(分担執筆)

「書を捨てず、街へ出よう」

人が住み、生活を営んでいる場所には、どんな場所でもその土地ならではの文化や風土によるコン
テキストが必ず存在しています。私たち片山研究室では、イタリアや日本を中心に、資料や現地調
査によって、その土地や地域のコンテキストを読み解く研究をしています。



下田市弥治川(ペリーロード)

弘前市近代建築の分布

都市史研究

近代化に伴う都市構造の変化では青森県弘前市を対象としました。弘前は商業エ
リアと旧城跡付近の行政エリアの二つの地域に分かれ近代建築が建ったことで近代
化が始まり、戦後に都市開発が進む中でもその商業と行政の二つの都市郭が形成さ
れました。旧弘前城跡の前川国男建築はコルビュジェの近代思想を受け継いだもの
で、ピロティなどのデザイン要素により、稠密な空間の東側街区に対して開放的なエ
リアとして特徴づけられたことが分かりました。(山口怜子)

観光地化では静岡県下田市を対象としました。下田はかつて政治的な港町で、町南
部に奉行所と共に大きな船宿街が形成されました。その後近代に入り町幹部が観光
産業に着目したことで観光地化が始まり、大正後期から陸路の発展と共に観光開発
が行われ町北部に中心部が移り、戦前には歴史を観光資源としたイベントも行われ
ました。現在では鉄道開通と国道延伸でより広い範囲が観光地として活用されてい
ることが分かりました。(斎藤波奈子)

建築意匠論研究

アメリカ西海岸で活躍したリチャード・ノイトラは、近代建築家、地域主義者と指
摘されてきましたが、建築と環境の調和を目指すバイオリアリズムを提唱したこと
でも注目されています。1920 年代から 50 年代の住宅作品の内外領域の関係を分析
したところ、近代建築的な特徴と地域主義的な特徴に分類できましたが、それらの特
徴は、ノイトラの中でバイオリアリズムという理念を達成するための手法と捉えれ
ば、全作品に通底するものであることがわかりました。(田中湖紀)

中世後期にヨーロッパ各地で自由都市が誕生し、新たな政治の場として多くの市
庁舎が建設されました。ヨーロッパ各国の州都の市庁舎を対象として比較分析を
行い、自治の象徴としての市庁舎という視点から建設時の市民意識を考察すると共に
現代に至るまでの市庁舎の様態の変遷について分析しました。近代以降の人口の増
減や戦災による変化はどの国の市庁舎にも見られるものの、地域によって市庁舎の
シンボルである装飾の継承状況には違いがみられることを示しました。(栢沼歩)

ライフスタイル研究

近年循環型社会が望まれる中で、リユースの推進は重要なテーマとなっています。
リユースの促進は、製品の使用期間の長期化や廃棄物の発生抑制に寄与するととも
に、製品製造時、廃棄時の資源消費・環境負荷を回避することにもつながると考えら
れています。一方で、環境省が行った品目別のリユース市場規模の推計結果による
と、住環境と関わりの深い家具の割合は 1.5% と低く、家具のリユースを促進させる
ことは循環型社会実現のための住環境分野における重要な課題と言えます。そこで、
リユース市場規模の中で家具の割合が低い要因をアンケート調査を基に考察し、世
代ごとの心理的捉え方やライフスタイルとの関連性を明らかにしました。環境省が
公開している資料を比較しリユース市場、特に家具におけるリユース市場の規模と
傾向の分析を行いました。また SNS 等を利用した WEB アンケート調査を行い、こ
こでは世代及びライフスタイルの違いによる家具のリユースに対する意識の違い
を明らかにし、リユースの利用状況との相関性を考察しました。(左右田絢子)

主な卒業論文・修士論文

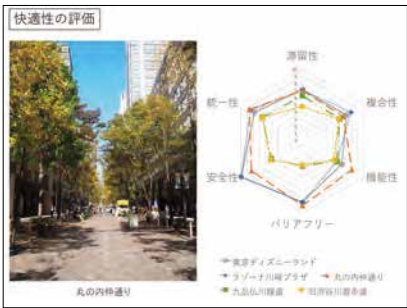
卒 業 論 文：「橋詰広場と周辺空間の商業・娯楽機能の移り変わりについて ～幕末明治期の日本橋周辺を対象として～」 米山こずえ 2020年度
「イギリスにおける温室建築glasshouseの登場 ーガラス張りの建築の認知と周知ー」 保久夏海 2019年度
「複合的都市としての箱根町の形成過程に関する研究」 橋本里実 2019年度
修 士 論 文：「林雅子の住宅作品における空間特性および設計思想の解釈について」 吉永沙織 2018年度
「重要伝統的建造物群保存地区における内部空間の変容に関する研究 木曽平沢を対象として」 宮本歩 2018年度

研究室の雰囲気を表す一言：Chi trova un amico trova un tesoro (よい仲間は宝物)

片山研究室では、文化的都市空間に関する様々なテーマで卒業論
文・卒業制作に取り組むことができます。昨年度は、週 1 回行われる
ゼミにて西洋都市史関連の文献の精読、文化的景観や西洋建築史関連
の先行研究への批評、各自の卒業論文・卒業制作に関連した先行研究
に対する考察等を行いました。先行研究の批評により文章の構成力を
養い、そして互いの発表を聞くことで自らの卒業論文・卒業制作の参
考となる新たな発見を得ることができました。学生の研究内容は幅広
く、西洋都市史や日本の都市景観、劇場建築など様々で、各自の関心事
項を元に先生から丁寧な研究指導を受けています。

片山研究室には、ゼミや研究内容等に関して疑問がある際先生に気
軽に相談しやすく、学生同士でも意見の交流が盛んに行われるような
環境があります。昨年度は 3・4 年生合同の全体ゼミがあり、学年間
の交流が行われました。所属する学生はみな和やかな雰囲気があり、
居心地の良さが特徴の研究室です。(櫻井更紗・松崎紗世子)

2021年度の卒業論文・卒業制作



テーマパーク化する都市の歩行空間

伊藤若菜・片野坂希帆

卒業論文

近年、都市部の再開発によって快適で魅力的な歩行空間が創出される一方で、画一的で非
日常的な空間が量産されている。本研究ではこの気づきに端を発し、都市の歩行空間を構成
する要素が、ある種のテーマパークと近似していると仮定し、「テーマパーク化する都市の
歩行空間」を明らかにした。まず、先行研究などからテーマパークの要素を抽出し、本研究に
おける「テーマパーク化」を定義づけした。それに基づき 5 つの対象敷地での実測調査の結果
を評価した。「快適性」の評価からは、都市の成立過程やまちづくりの手法の違いが大きく
関係し、拠点市街地である丸の内通りと、複合市街地である九品仏川緑道と旧渋谷川遊歩
道では異なる形で「テーマパーク」化が進んでいることがわかった。



銀座における建物の更新と建築装飾の表出

～敷地割りと土地所有者の変遷を通して～

室井千花

卒業論文

銀座は街並み景観を更新しながら商業空間を構成している。対して、裏通りは江戸期の空
間を継承している街区が存在している。本研究では銀座を対象として、災害復興や土地所有
の動向、敷地割りの変化および銀座の建物の機能分布や機能毎の装飾形式との関係性を分
析し、銀座の表通りと裏通りでの土地利用の比較と建築装飾の表出の経緯を明らかにする
ことを目的としている。建物の更新時期の敷地割りや土地所有者を確認し、合筆が進む条件
として大通り沿い・角地などの立地条件に加えて、災害による更地化、土地の所有状況が影
響することが明らかになった。また、合筆された敷地に舶来店や百貨店、新聞社など新しい
業種の建物が建ち、新しい装飾様式を取り入れられたことが明らかとなった。



(写真出典：https://www.konest.com/)

韓国における半地下住居の変容-商業空間としての付加価値

大久保理菜

卒業論文

1960 年代半ばから始まった経済成長の影響で都市部に人口が集中し、住宅難を解消す
べく登場した住宅形態の一つが、「半地下住居」であった。現在では居住性の低い半地下住居は
居住率が低下しているが、一方で若い起業家たちがカフェなどに商業転用する事例も見ら
れる。そこで、韓国統計庁のデータから現状分析を行い、その上で不動産業者及び商業転用
オーナーに対するアンケート形式のヒアリング調査を行った。その結果半地下住居の世帯
数は減っているが、韓国の所得格差、貧困問題が課題として残っている限り、低賃料の半地
下住居の需要は継続し、ピンチで心地よい空間としても商業的に魅力があるということ
が分かった。



荒川堤外地における自然と人の共生空間の再生

堀菜那子

卒業制作

近年、豪雨などの異常気象による災害が頻発しており、そのたびに私たちはインフラを整
備することで住まいの安全性をアップグレードしてきた。荒川はその特徴が顕著に表れた
高い堤防が兩岸を囲っているが、人々の生活は河川から物理的、精神的に切り離されたこと
で自然災害に対する危機感が薄れ、荒川が氾濫すれば浸水被害は免れない堤防の際まで、水
害対策がされていない住宅街が広がっている。そこで、築堤が進行しつつもまだなお荒川周
辺に残されていた明治初期の生活空間「堤外地集落」に着目した分析を行うことで、生活空間
と荒川の関係性を明らかにし、その結果に基づいて現代都市における河川と人の共生空間
の再生のための、コミュニティスペース、アクティビティスペース、斎場を設計した。